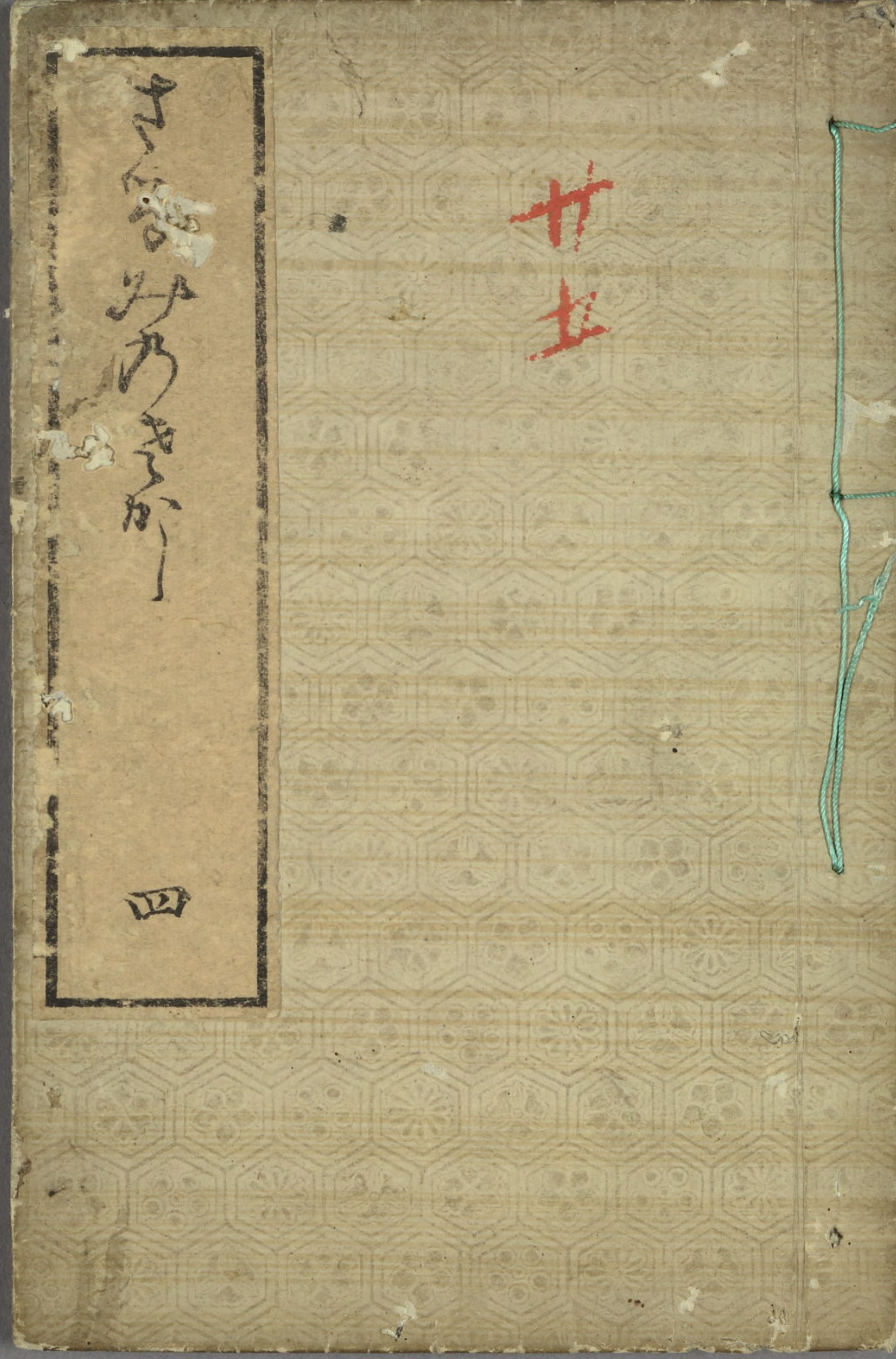
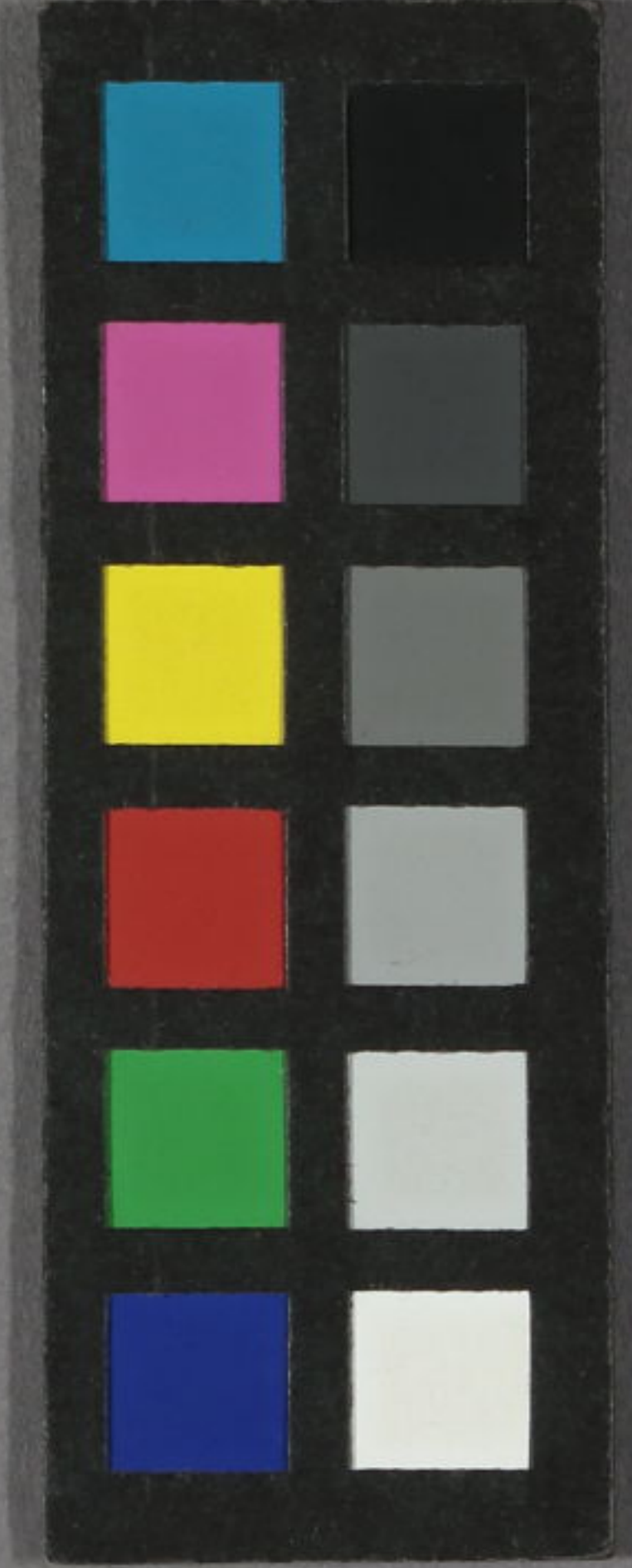




巻の四

秋風や蓮をちうに花ふと

秋

秋風や蓮をちうに花ふと

秋風や蓮をちうに花ふと

子知
漢人

晋風
文庫

東園
集

秋風の立に池中の蓮もま散は是たおく一輪の蓮
を咲残りゝゝゝ世免てゝのちゝゝゝと云句みてい
だ蓮の盛くるゝゝゝやなり失て秋風の吹渡に
静るゝゝゝ物も表はるゝ月日をかゝるゝ池中
一輪の蓮も咲残りゝゝゝと云句みてい
とたのちゝゝゝと云句みてい

やう秋風をむつて力まゝに云向からうへにけりやまゝに
一掃之に書いあやう説くまゝ堂へ達と云ふやうに
又けり向ふ武よりけりまゝに大徳まゝ堂う向ふけり
まゝとてまゝに名をすれは疑ひて居せしものこそ
まゝ向振り名あはれと違ひ人のいふもの

かみくくとぬけ初る葉や秋の風 杉風

榊嬢の句やう秋風に老のいふまゝを形容しうて
けりまゝに云向ふ力まゝに魂の場あはれまゝに秋を殺
厲の氣やうに法字木零落く一年の暮れ初る因てけ
榊嬢の句やうまゝに秋風に金氣殺風にけりまゝの

代枯表せしむるの風を思ひ合せて秋風ふあれぬと云
ふりけりまゝに

芭蕉まゝに何ふれや秋の風 路通

是又榊嬢の句に理外の理やうまゝに理を離れけり
まゝに破まやうに芭蕉まゝのけりまゝに秋風ふけり
果て何うまゝにん人も又幾秋風を怪くまゝに何と
なるんまゝに落しあはれまゝに外ありと観おれ念
たれまゝに

人かみくくと榊まゝに組秋の風 琢碩

け句同——採婦と理代以て解を解くは理より
解とてさう句を——の採婦の心あるをれは上の秋風
う句の格より秋風と物を零るるをれは上の秋風
情を借るる句置て家を知を起して二峽の猿声と結ば
無ふる偏句使する時は猿とて人持するは秋風より
と人の腸を断ち切るの祖吟の糟粕をよめれば又
他を起して人より採する手組て秋風の哀情を思ふ
やと猿情より祖翁の粕をよめたりとの求尋るる
一ふりて猿の上より句記するの言ひはうて実情は人の
心思ひとあるなりは猿の影のめ——いんや人か
てはいふもさうと哀と借——猿とて猿の情はく——

趣て蕉門の句は讀むるもさうは格の感なきもの
——の情を採る時に哀樂も感心限りなりは——
角と情の深き思と断ち切るる情の深き句は思ふ
の之も然るなりとや言ふ法も新しき——作
らざる句も人か知とて猿とて思ふるも思ふ
ありまはさるるものも採るなり句也

か賀乃全昌寺に宿る

終る秋風——や重衣の山 皆良

る夫の細き云々ハ脈と病て伊勢のふせと云ふなり
はれハ先きてけ句より——の秋の原とて

たりけりもの思ふも残るものうのみ 雙鳥のわかれ
 予ふまふうと予も今日よりやさす海にまきのあ
 大なるの城下全昌寺と云寺はまゐる 秋か賀の地なる
 一前のおけ寺はほりて 秋風をすやいふ心と残る
 一軒の序千里は同一 吾も秋風をすて 虎寮ふけて 明あ
 空のて 讀子のあすむふ 秋風をすて 食堂ふけて 六載
 あのおもて心早車ふけて 堂下ふるとほり されまきのふれ
 双鳥孤客とあつて 禅院ふけて 秋風の香をすて 旅情乃
 やるまゐるこころ かにりま思ひ生やるまて 一句の言外ふけて

け句色をみて一句をちりり菅原ハ風騷^{サバ}とてりのあるふ
月夜にて菅の穂もなる思ひけりそれハ^キ白を掛合
せて又秋の白をも含て五七ふみぬりなり一句の表ハ菅原
の^{モロ}いふが^{モロ}いふすれ合ふハ^{モロ}いふも^{モロ}いふ下りて
終ハおぬなる一と思ふ合せての句にハ菅原ハ池沼畔に
の地とてりなり

新書に「島」は「芋島」と云ふ所れども此の字も猶も
ち――^ウ^{ユン}榎金の字を秋小部とぬりて又榎金の色の
黄をもなるといふ金氣の所を勘ぐるなり榎金の名おなじ。

と云ふ字の多きは似て若菜の多き故に八枚も大きく云ふ
もの之をよりぬるもの多きは秋の節風のそれをいふなり
色を白化するに際にお用なりうへは根ありてその根ハ若
菜のよりて大いなるもの今俗に花と云致はうへを

く川、菜や猪の肝、芝の記、りり 去来

く川、菜やの初の子ふ力を入る所より味あるなり
の芝もよく秋と云ふ秋の節風のそれをいふなり
と云ふ川、菜の肝をいふなり眼がふらふれりて
のそこ思ひやう初の子を認のすなりと云ふ
肝の芝もよく例の字を認のすなりと云ふ
亦も極く多し初の子の味をより味と白化する肝要
の場なりと云ふなり

大比、蔵や、く、ぬ、菜、菜、や、上、付 野薑

く川、菜やの初の子ふ力を入る所より味あるなり
の芝もよく秋と云ふ秋の節風のそれをいふなり
と云ふ川、菜の肝をいふなり眼がふらふれりて
のそこ思ひやう初の子を認のすなりと云ふ
肝の芝もよく例の字を認のすなりと云ふ
亦も極く多し初の子の味をより味と白化する肝要
の場なりと云ふなり

三葉ちりちり 既にかれ木や桐の苗 凡非

け句格の趣向なくく、安んじ枯木やと云ふ所け句の
魂なくく一句のさぬ只け文字中、生半くく云ふちりてと
云ひ、苗と云字と動くぬちつ、自然云けつ、一字つ添
削を借さるの句作し

文月や六日七夜の秋の如し
芭蕉

侍歌のま向学も四月五日の晴れ心かけてもや六日少く後し
 みやうくのま巧真の役^{キツカラデシ}け童女の二尋まつくす
 さぬ七夕ハ形又六日も老の折れさうハ思れぬと実情
 ようの向ハまぬめあふ古今誰何歌に六日の秋の歌も
 三つ一とまふ心をもさふあふてあふの何ぞをさあや
 らん是ホのまもあふてあふてまぬのまぬハ月葉の端もあふ

合款の本は、義永といふ景のけ 全

合観本ハ何れも多きものにてタカキとて駭くものと俗に
稱するものあり之を唐土より來ることをあひ合するとて人の志
をやわらげんとて觀樂せむるの功ありとて合歡本と
名付し之を多しは本を極むるより多しとてけ玉の人多
極るものなり今ハ一度の早合とけ玉をよりとて樹ある
より極むるより今や内の多しはけりあきとてくちりけり

に物もよき思ふゝあるりなれはあづるもなれりともなひ
移むる木の葉も風も厭ふるやと魚もさるるを思ふるの心
心を押して葉も枝も白く他の方妙なるはの心等紙にお
かきし又今を待たるるふれを以て境を隔て早の氣を移
さるるをとも思ひ合せて葉も枝も動くもなれはあづる
新垣拾遺集の七夕の意もくみもいふやうに一夜のうちふ
そすらんは歌の心とけ合せて移むる木の葉も枝も他
れも思ふ

七夕やあよりいづうはこゝろぬ下

伊賀少年
杜若

少きとりき六兒童の一年ふ一層今思ふの解きと一言下云
下してあふ他はあふるや又思ふ

うやこも何よりあふるやお撲取 去来

尋常の人よりあけて肥大あるさなをちやむ情のあふる
つめなれはあふるや却のうらな何よりあふるや思ふれぬ大
無きと云ふ外あふるやもつは一言下云うるは情のあふる
心祖家の現力と云ふ心祖家の事と云ふは思ふれぬ大

新の月と新の月とあふるや風麦

は句新の月のあふるやと云ふは思ふるやと云ふは思ふるや
と云ふは思ふるやと云ふは思ふるやと云ふは思ふるや

さうしてさうなるぬうごふれ日待万の秋鳥と思ふこし

笑ふも泣くもにはは木槿うれ 嵐原

嵐原、句風蕉門一作の作者にして總て人の事と欲ぐ
自得の句多し句木槿の盛りとさうさ成観あつてみまを
槿花一朝榮とふふ取一句の姿を伴ひて中お姫の歌に成
よあこひもどき苦も樂もつるにハさむるな世の中と心も
面ひて句意ふれを以て解しあふ句一はふとハ一の榮を
詠めしむをさるれとちまうに羨むと思ハ又かき成傳ふす
泣く歌くころあして羨ふ處と成歌記して歎きぬれ又
雪の盛り何うさや笑ふも泣くも似てハ妙作とてあふ

はと云ふ觀念の場にして笑ひ苦樂常任の世界なりと
勘破するハは一物のなす空とてゆふと餘意探る

子とおつておつては木槿外 杉風

是もさう一朝の榮暮落^{ボク}花の意と観してはおどろ
しく云ふさうな痛生氏郷の辞世にハかぎりられハ歌にも
なにもさうの歌いさみちかき秋の山風といふさう思ひ合
さる木槿のさうな盛と観する句とハ言外はさう
さうかけておのふさうな盛のなをさ下ふれんハ言
さうさ来^{ツガ}さうとてさうさハ不味さう 杉風句風外

高煙毫ひふおとと 柱うか 千那

外ハユむるまふ〜の情ニ外に淋〜あり易ク得
か〜高煙毫の折の淋〜ハ許〜もふ〜
〜み成探〜も物〜も〜
〜柱〜ハ一字のぬ〜も〜
〜物〜も〜

も〜れ〜淋のゑるもや 儼雨 史邦

儼ハ儼の字〜
雨言其沾衣及物皆生黑儼也俗〜

〜仮名を付〜
梅雨ハ混〜
〜秋乃也雨降つ〜
〜吟〜
〜果〜
〜
の句意に〜
の〜
〜
〜

〜や 数の内より 助〜 且蒙

初嵐とす、時も秋季にていまだ何らき風ふはたさずされと會
型をちぎの伴や一なりけりるとる金しそよしくひあふ秋
字ふする草のうちより風の吹来るさめ冷やらみく空も
すこ〜曇る〜なるめを言外にあらう

秋風やととを
寄らうこくを

三川
子尹

新風やと新風を吹かせしは詠めさるゝ次ぎとも
 新風を吹かせしは詠めさるゝ次ぎとも
 新風のこゝに詠めさるゝ次ぎとも

送ひ子に親のゝろやすき原

羽
紅

人の親お心はやみおけし縁も子成おふたふさよむぬ。乳と兼
輔の歌の心よ通ひて果もあすすもあけ東西と見よまじひ
ふ心すよむ子の親のうらやましくもつまされハ原と字す
一句の邊成備つと味あり

八
渚
お
の
に
遊
び
て
築
く
の
文

書序

すきく 楊の先が芳に 元兆

詞をすゝる 俗に笑ふと云ふにけ句のえりをかぎしり
 する 扱ヲコハ俗ふふ天テン秤ビシ棒ボウのふしき言ひく人の苦スヘキを
 う成けふすまの穂ホがすのふくしてなヨブやうふらん思ふと

つくしやうつふにひそひ

山
ふて
卯
七
ふ
ふ
て

君より中へ成る氣持
去来

ひくとふ六也。時より日見へ通る所の峠に郊七六去来する
 長嘯を仰す去来又も雲の岸より向井平次郎と云ふと
 彼地祭酒の氏族にして後に京師の醫官となり去来六の
 次男ありて何れの殿下仕へ文武小達し又醫學成すむ如
 七六と男ありて古くは然れども此山より去来城送りし時

の吟を爲のま祓く子をどりしる古歌も多くある源氏物語の
 のりのようにおもしろく出てお祓くと有り又古今集の秋の歌
 夢は神をなすも祓ひ出てお祓く神とておむをよめる句
 ともありておむをよめる云々言外の事もあるはつて止
 るもの思ひぬるもの情に感じて想思も言外におかれ

草刈ふれり田正り萩乃處平田季由

萩の歌を諸子よきうてあそぶるやあそぶるの如く句を
 刈刈思ひやりての如く又萩の心もあそぶる如く
 心を詠める処言外はすてう草刈の萩の心もあそぶ
 て刈りて句作りてその実ハ萩の心もあそぶ如く

云々句とある處

元禄二年八月小供されてこのく
う三載路ふかき御しるふ
かのふよといふ侍りいせまを
達もると

いつくふたふれ臥も二秋の原 名良

け句奥羽り御の句よりて前の表の山と云句のほふ生や
細通ふと行してしを入集の時篇の添刺をれ一も詞あ
いふ侍りてふ煩るるへ行してしを句をよくけつる
を何として今テの五文字は連一とやと考れ八山家集よりつ

くからぬあうくてもふ伏むとけふふれ一とるまの表と
ふれもは枯れて又一時の事柄なり

桐の木ふうつゝ晴ある塙の内 芭蕉

け句お心の解一柄かきみみて又人々の夢さるるが
境へ又け句お切字のさる色く解く人何れもはあやも説
めくあやと云云或よく心持て切字のさるめと云と別
然一塙の内より青桐おいとよく延ひ育ちたるふ其家接
けり毎朝顔のさるさる思ひやらう句の塙の内よりて外
よりお丹のさると思ふやう句のさるさると思ふと云
西幽玄の境よりてその境にいふはあやが

百舌をなくや入日さし女松原 凡兆

鶯の夕陽の景色の句より女松原と云所魂之夕陽の歌に女
松の赤き葉合せりて言みは実景鶯の鳴きをさるるものなり
はるるべ旅情の淋しみ思ひとされど

初房ふり焼くれまゝと 七人 落梧

旅店の句より探るるは焼くを引くは初房はみ成す
故を思ふの情起りて句作の思ひなり焼くを引くは初房は
句より初房と云ふは旅情なりなりは句作又一体より何
もなく思ふや小句作はるるは思ふれと旅情備りて句作の早

句多く生ずるもの俳句のさすなり作り世に七人といふ
る人といふ

堅田ふり

病房におさむ小房に旅情 芭蕉

堅田は旅情の句より堅田の句より堅田の句より堅田の句より
堅田は旅情の句より堅田の句より堅田の句より堅田の句より
有かきくも時より堅田の句より堅田の句より堅田の句より
思ふ堅田の句より堅田の句より堅田の句より堅田の句より
の句より堅田の句より堅田の句より堅田の句より堅田の句より
より出てお作り旅情の句より堅田の句より堅田の句より

雁のかゝ田ふみりて移るがとせられしとて其角う移馬
の記を記し中々そのおぼえのすふきとてよせらるる一、家々の
又一匹のふつ海をもひひて格ふふひぬ、こききうや海田や
とかうくられぬ、いふし、老くはあぬ、いけ作意門の真句
あり上座の人へ念ふ求めてけ境を作りたる事、お心の人の世
念おふしとみでよき句とも思ひたぬくお出らるるなり
これにお心ふ教あるに念ふ念の場を偷するなりこのお心なり
これ念ふ人の心なり心念ふ求めて一句をよき自然
増えしと妙あるなりと念ふ、再とて備へて念ふ
うちにもお心求む事なりけり、肝要と云わたり、又
秀を記し、の場あり

海士の屋々小海老ふり、いゝお 全

いゝと云ふは上古かろふとて、虫やて漢名ハ龜馬と云
頭ハハカろふとて、かろふとて、かろふとて、かろふとて、
鰻の尾を曲る形のぬ、一、家々、と云くむ、と云の、
海老やあふ、海老かろふとて、足もかろふとて、
これ、いゝ句の小海老の中、かろふとて、小海老の、
いゝ、奇工の、いゝ、とて、前句、とて、位四五、
ある、いゝ、同日、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、
の、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、
いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、

秋とてげよりいふるも一実葉のうらみふちをわが
んやな秋をふあふといひるもいとわ同とみてわが文
字をよめよとては秋をまげ止風蕉門の同祖と仰ぐ
眞とていふ詞の要とまきいふもあつた中へ尋
常のふもあつたげ又甲の下をいふと寂しき情
境の猛きふりあつてさういふもいふもあつた
一つに秋の涙を惜すもいふに実葉を戦死の心情を平
常物に盛衰記をかりし海思ふ出されて何となく情にさへ
甲曹の文字顛倒ハ俗智の極なりとあるなり

菜白田や二葉ふち中乃虫のあり 尚白

け向虫の秋とていふはつたふち新しきとて生んて菜白田の
野よりあつて二葉ふち中乃虫をうばせむ句作家
がこよも虫のつとめとては秋をうばせむとていふは
菜白田をいふはつたふち新しきとて生んて菜白田の

とてけりや碓土ふち中乃虫のあり 風愛

景色は秋の句をいふとてけり虫の碓土ふち中乃虫をうばせむ
田のふち中乃虫をうばせむのけり中乃虫の月をうばせむ
けり中乃虫をうばせむのけり中乃虫をうばせむのけり
ハ吉とてけり中乃虫をうばせむのけり中乃虫をうばせむ
に説くはとてけり中乃虫をうばせむ

歲月也矢檣小海人妻人
夫千子

三月か鳶のつゝ海をくぐり
之道

け句初心の處着せぬ所ありて破言偷の句こそ破言偷たるを
 以て蕉門の一格とする句こそ心持ぬ一 句意ハ吟一と計
 するハ又小知れざり一 養トウの字印本インホン小フカと仮名を添
 るありて解文解一 解一 果には養の字はフカと訓ハ決
 まるるなり又フカと訓ハハ又解も金と訓ハ是ハイカと
 なる仮名の形違ひともありと思ふイとフと違ひともある
 本草個目に烏賊魚乾セウイカ曰イハレ養トウと云ふはホシイカのものに
 して今をすゝめするものも乾ホシイカ烏賊セウイカとも文や解やある養の
 字を用ひて只イカと讀ヨマみてホシイカと領解リウカイさすなり又俳諧

粟稗と月生所なるめくら月よ 半残

粟も生半稗も生半世の中ハ月生所秋とありねむる空ハ
新月のさやよ思ひ増すしそ十分の秋と云ふこと知
るしとら月おふ新月といふ西国一中秋十五おふ海
はりてするともおぼしと云おぼし月おふ新月と云これ
ふくら月おふと云ふるをさる

月とせん伏見の城に於て 去来

伏見の城ハ豊太閤築きて関ヶ原の役ハ賊將の爲に
懐るに後築といつても程なく瘡痍してとやけけも結
構の残る計ハ後築といふ景色も思ひ合を伏見といふ
名ハ両合をといふ持節に月とせんといふは外ハ
となくして又さ格と云ふ

お菊をさる合ふお菊して

にりーろろ 松と云ふよる月お 伊賀 土芳

にりーろろの五文字塊にして月おと云ふ受動人言葉
書の月雲にありし 松と云ふよる曲にして芳合の用と云ふ
はつはんと云ふは月おの殊にお菊を指りて心結し
たらぬと云ふはなり 伊賀と云ふ外にすべしなりーろの
お五と云ふお菊の對してのとも云ふと云ふなりー

加茂小詣 さくさく 候のかゝる哉と
かの上人がたなこり

やゝろが神祖はあつてはなれ

月影や柏さうろ 狭谷の上 史邦

たちこのやゝろが加茂の攝社サキ 柳尾の社これ攝音
の通ずるゝ俗にたゞるやゝろがさくさく候のかゝる哉と
上人の六撰集の西行上人の仁安三年十月十日の加茂
の社のまうて幣とまゐりし柳尾の社のまうて柳尾サキ
の社とまゐりし木の下に月影のさくさく候のかゝる哉と
さくさく候のかゝる哉とまゐりし柳尾の社のまうて柳尾
の社とまゐりし木の下に月影のさくさく候のかゝる哉と

さくさく候のかゝる哉とまゐりし柳尾の社のまうて柳尾
の社とまゐりし木の下に月影のさくさく候のかゝる哉と
さくさく候のかゝる哉とまゐりし柳尾の社のまうて柳尾
の社とまゐりし木の下に月影のさくさく候のかゝる哉と

左邊の六条ふかきさうろいゝゝゝ

やゝろいゝゝゝ

新おろいゝゝゝ 新おろいゝゝゝ 新おろいゝゝゝ
伊賀 卓袋

東西の本願寺にござる六条のさくさく候のかゝる哉と
さくさく候のかゝる哉とまゐりし柳尾の社のまうて柳尾

徒の男女よきおしとほてハ告知識の利方をつて
やう利便するこ又利刀をさぐりたるの四重分子
なりしとてハ佳利便ハやめたるなりたるなり
る新月おとハ新は所ハ新して新の心なりとて
庭を新しとて新しとて新しとて新しとて新し
たなりとて新しとて新しとて新しとて新し

とて新しとて新しとて新しとて新しとて新し

月新しとて新しとて新しとて新しとて新し
お新しとて新しとて新しとて新しとて新し
とて新しとて新しとて新しとて新しとて新し
月を新しとて新しとて新しとて新しとて新し
の文字は月の方ハ新しとて新しとて新し

京兆世志去年の月とて新しとて新し

け句向上の作やけ理外ハ理ハ新しとて新し
多しとて新しとて新しとて新しとて新し
四重分子の一人と称せしとて新しとて新し
まおの月を賞せしとて新しとて新しとて新し
俳句とて新しとて新しとて新しとて新し
雅情を通じとて新しとて新しとて新しとて新し
とて新しとて新しとて新しとて新しとて新し

も作りまふる一すうまわしとて送るもさかして去年
の月とて神魂まうとて送る一今年花似去年好
去年人到今年老とて意あらと取りて今年月似去年好
去年人到今年老とて意あらと取りて今年月似去年好
美人遙^{カカリ}音塵^{カカリ}闊隔千里^{カカリ}共明月白氏文集三五夜
中新月色二千里外故人心ち作りて趣も思ひ合さ
今秋の月ちつとて去年の月とて八向との作ホー又
老とて心とて留中百とて子とて世終人の記あるやとて思ふ
縁とて破く^{とて}とて^{とて}一とて^{とて}夫も自得の向うとて送る

風のおもや空お月むとん 凡兆

秋風の吹きたるもよめる月空に一葉のちとなく只片光の月
おととふ意はおもやとて思ふとて月むとんとて思ふ
情我合^{とて}とて思ふ

ぬりこひてこよひあがりぬ月の句 尚白

今とぬりこよひこよひの月空に一葉のちとなく只片光の月
向に^{とて}ぬりこひてこよひの月空に一葉のちとなく只片光の月
妙手の上に^{とて}何れも^{とて}句成りて面ふとて思ふ

向の能き相も月とて 曾良

月を詠むふよき家といふなり成向のよき相と云たるを
旅店とすすこし是も月と云ふに深き察りのなる相と
やふに降りてよきあふ泊りたるハ入の妙なりといふまじけ
なり相係と云ふふもなき無し

元禄二年三月十五日

先比の明紳小指遊切上への古例と

月清一遊のりて砂乃上
芭蕉

矢張り勝の時を白くして氣比の明神と越前の一宮に
して仲哀天皇の靈を祀る氣以へ仮名書きして本字は
筭飯に遊行上人の時宗より相別藤澤駄にありて藤沢山

清淨光寺と号ス廂祖ハ一遍上人也細ク云上畧社野神ニ
て松の木廿五に母のり入る。誓之の白砂を我と爲す
往昔誓切二世の上人大致発起のり有てふくは成切
土石を爲公泥淨哉かきとて系信從來の如き
今ふくも神氣にふ何と爲公りふこれ成誓切の砂
持とて傳ふを也亭主のかりくる云て此系文を畧して
詞を出生しとて白意并とす此より此の文を照る今
世の如く二世の上人を隆阿上人とて上人より代々他
阿を以て廂稱とす

仲秋乃金
之子と云
等一

かゝるおの月もさふらう 聖を道送 去来

猶子ハ甥のさかゝるおと影ハおとさるの月に対して
古今を思ふの作ハ詩歌連能も同情も中かかふかち
おの月も思ふ人さるものかと実情より出し句やいふ
も行ささふいふことと月ハ對して思つてくる哀傷言外
にちる舞――

明月やさふハ寺の茶は木々々々 昌房

良月の月を誦むる其は光は清の地にておもさるる
さふらういふを云ふる句やいふも思ふ寺の茶園

にいてさふ句の解の月ばさるるなく儚き葉の本の根
くによも種も実ハ月秋の風景思ひまふぬおふく
又さふらうと云へ――

月見さふ人の碇ふいさかハ 羽紅

月下の持衣は待くも葉する所ある人碇ふいさかハ
とを新くささつはさふは猶望しつ月を種に衣
う月おの夢つて秋風情を添ふ又さるる入るすふ一物の
月の外さふなく今も碇の音おせりさふに返り家心
をいささむといふさふい言外は女的情さおの道よ
おをみさふいささお月下持衣の音をさふつけの歌

情も無一人の信をすて已ら心もいそがしとてくくめつ
にいて人の心も魂ちうとあるもの

僧正のいりこの小倉にさぬくれ 尚白

け句ある小倉のさぬくれすて何うなと句あるをさぐり彼の
む山の僧正の信を思ひあはれ作した大和物語ふじとて
のむねさぬかおのりけりなみ条なりて自いさう
あれさうとみうくれてさう小倉のさぬを思ひあはれさぬか
おにさみふをさぬくれさうとて思ひあはれは作にさぬに
りうさぬ人の心もにけさぬいさうとてさぬいさう
さぬやの中にいさうけりうつさうさぬのさぬのけさぬと

よしてかのさぬの小倉の女の方さぬくさう僧正のいさぬ
小倉の信とての女さぬくさうの一曲あるをさぐりけりな
はささぬ僧正の信を思ひあはれ作した大和物語ふじとて
さぬの信のさぬくれさうとて思ひあはれは作にさぬに
今の信を思ひあはれ作した大和物語ふじとて思ひあはれ
さぬの信のさぬくれさうとて思ひあはれは作にさぬに

小倉やさぬの信乃さぬ舟 凡兆

唐土の俗諺小倉王の臣伍子胥が靈作潮毎年八月十五日に
高く漲るさぬり方連勝覧日吳王既賜子胥死乃取
其屍盛以鸛夷之革浮之江中子胥因流揚波依潮

来往蕩激隄岸勢不可禦或有見其乘白馬素車
在潮頭者因為之立厝每歲仲秋既望潮水極大云仲秋
既望八月の中也子足日を於たり江中ハ浙江ハ其浙江ハ杭
州の錢塘江と云ふ依て唐土ハ錢塘江の潮をいふ也仲
秋望の潮の漲るなり其聲雷の如くと云ふ日中み初
潮と云ハ子正日の立ちしふするはあづけ実ハ初の子には
不例なりと云ふ漲るなりはけのかうて初てなるを
ハ初潮と云ふなり初潮によつて出る月をハ新月とも
初月ともいふある也——地勢ハ依て潮水も漲る
海中岩石ハ逆浪なりと云ふけり鳴るを登す唐土

錢塘江の地勢ハ——蕩激する云云邦ハ鳴門を
夢にも漲る陽流——鳴門を登す也鳴門ハ名付
たりされハ仲秋の既望ハ初潮と云ふなり思ふにこれ又
多岐に合ふなり初潮と云ふなり初潮ハ急勢の極
極と云ふなり詩に千里色中秋月十萬軍聲半夜
潮といふを歌合するの作といふ云々初潮のなり諸書ハ説
初潮ハよき心なるなり細く云ふハ初潮ハ八月十五日
の満月ハ十五夜と定するハ十四五六日のうちなり初潮
月の大なり初潮なるなり初潮ハ初潮と云ふなり初潮
初潮のなり初潮ハ八月十五日と定するハ初潮ハ初潮と
なり初潮ハ初潮と云ふなり初潮ハ初潮と云ふなり但

一戸や床もふもこよむく
去来

桿の穂たる迄くさくさ色くぬ
戯人

造糟曲日やカ〜ミ喰ミ子荒島 正秀

穠ハ掃原の稻之秋作もこの也秋季十月の穠と珍
 しくさな鳥も吟みずしふそ一句の姿候備りぬる鳥の
 聲もわらぬよしのものやうて荒畠へ移りてよ言ひ
 みの秋情寂寥しく山家の作眼おみある

物の音いとうなふゝ桑ふ子哉 允兆

一もふもら王安石の詩を影ふく句を作する
 心持なり 早角の奥を信く 凡兆く句又ぞ
 まを信くと云へ 更ふ改るとも 義やう方ある
 より 摘括ふく云義之 樂六用 ^{ミカサ} 寂く 義に 寂は
 取らハ山間田畑の淋くと思ひたのつう 秋暮の余情言外
 小字一もを標して又可る 夢の葉山子を云べしてむ 例
 とハ句作の淋く 秋暮の餘情を云く 云々 され
 ハ山田のうちやうく 一ものおを云く 云々 寂莫の情は

是の物の言と云ふ魂と都て詩句を打ちて若句するを
俳諧歌作りの格と云ふ

むつしな
柏子とす里和
魯

増山并小里并樂十一月に去本九兆の誤りや又なりしを
 之のち大佐祖翁も増山井を用ひぬと云ふ温故日録
 にも十一月の大内の外なるに能く云ふといふと云ふれど
 誤り生ずるハ誤なるなり南村もなすれ月の季なり其大
 内の神楽の式は有様なりむつゝさるもさるも只うちさ
 めて囃すのみと拍子も云ふ句作りてずと云字を云ふ
 云字は倉さるもさるも自然作眼氣なりて実情の場かし

旅枕麻のつゝ合ふ軒乃下

江戸

千里

山舟旅店の枕標を形容する自ずから枕と云ふつゝ
合ふと云ふ事なれば軒の下と云へるもつは旅泊茅
屋のさめとすゝゝ旅の角よりつゝ合ふ縁さうで家に
お宿の棲き枕つゝ合せて暮るゝと流るゝとてさうも麻とつ
合ふと云作りて軒の下とて内外のさめとわづるゝと知
言ふお新場由ゝ旅の本鳴ける山店の旅泊茅屋のさめお
ゝのさうで暮す宿の一時旅の場ゝるをさう

鳩ふくや旅柿原の暮るゝ白田

珍碩

鳩ふくゝるゝ夫木抄堀川百首等お新場とて説く多し奥
儀お袖中お木老く合ふとて増山井お袖中おと引て山鳩お秋さ
るゝおけと人鳩のよみとてと合ふと鳩のあつゝのやうにさ
うはこは鳩をぬゝるゝとぬゝるゝとぬゝるゝとぬゝるゝと
すゝゝとぬゝるゝとぬゝるゝとぬゝるゝとぬゝるゝとぬゝるゝと
かんせゝゝゝの山鳩とてさうとて景色の白とてさう

上りゝ下るゝさうや穂の天凡兆

お南実景やゝゝ秋の空のさめとてさうとてさうとてさう
お天のさめとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
るゝとてさうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう

ふみはむもはるが稲の秋 土芳

け句はるを来すのふすく早苗くくくつゆのふは稲をふ
よきく秋風のふくく云をいって味くくけけの早苗お
もくくふくや刈取稲の秋く来くくく云句のふくふの
りつふくよく味くく

稲くく母ふ出くぬくふひが 九非

稲くくく母ふ出くぬくふひが 九非
稲くくく母ふ出くぬくふひが 九非
稲くくく母ふ出くぬくふひが 九非
稲くくく母ふ出くぬくふひが 九非
稲くくく母ふ出くぬくふひが 九非

田家の恵めより柳ねたる春——自然の場か——と意せ
と志すより言外ふくく

自題落柿舎

柳ねや梢くちくくあ—— 去来

落柿舎ハ春もいふあく去来く春の別世の早く
一々柿を賣くく柿買ふ約くくふくのお花の——
おまハをくくく依てけをくくその時の
く句は味くく——記ハ風俗文記述ニ出ス

くくはやくくく柿の下ふふ 加洲十松 塵生

心合ふふも大名より歌の都鈴あすもより
生さるゝの行列を花すさゝとて大名をみふも
月日とふふ一白のふつはるる里中樂の白言奉可

け
 姑の
 四五日
 弱る
 ず
 ず
 け
 丈
 中

あゝの儘やうり秋の情言外ふるも一弱ると云ふ
魂の境やうらむ日とハ少くうつろいも採かてやく
枝打し身を含めり秋のま合モ外ハ物をくつ淋し
言外ありけれ

立出る秋の夕や風木ち——
凡兆

は南秋の夕暮の如きと形容してその淋しい上を擧げて淋しい
 者を立出祿ちたつこともあつてとよまれゝるゝとて底意は
 三つおまゝでゐればおもしろく風をちゝのよそがめゝをてた
 らんと出来ゝゝと云ふ一句のよつはゝやゝ寂しいところを
 そとせゝ句ゝと味あゝゝ風をちゝハ段雨書ハ風疹と云ふの
 ちゝて俗ハ風をちゝと云ふ名ハなちゝ

世の中は
弱肉強食の
尾乃ひき
全

髻髻の尾のひまもなく、
 世の中の人ねられ
 けしひまなく世にまゐる
 と云ふ——向ふ髻髻さ
 けしひまなく世にまゐる
 と云ふ——向ふ髻髻さ

